



産科医の経験とホスピスケア (3)



医療法人パリアン理事長 川越 厚

24時間いつでも、責任を持って必要な医療を提供すること

「ゲレンデでスキー中のお客様に、お呼び出し申しあげます。茨城県友部町からお越しの、川越厚様。

病院から電話が入っていますので、係まで至急ご連絡ください。」

事件が起きたのは、今から30数年前のこと。医局の先生たちと一緒に車で坊平スキー場（蔵王）まで遠征し、まさにこれからスキーを始めようとした矢先のことである。当時の僕は30代半ばの若さ。茨城県立中央病院産婦人科の医長（責任者）をしていた。スキー場まで電話してきた不届きものは、留守を頼んだ若い医師だった。

「何かあったの？」

「先生、どうしたらよいでしょうか。高年初産のベッケンで、前期破水です。」

蚊の鳴くような声で、彼は助けを求めてきた。

彼の言葉を翻訳すると「35歳過ぎの初産婦が来院しました。胎位は骨盤位で陣痛発来前に羊膜が破れ、羊水が漏出しています」ということだ。

高年初産のベッケンということであれば、経膈分娩介助にはかなりの技術と経験が必要であるが、僕はそれだけの理由で帝切（帝王切開術）に踏み切ることはまずなかった。もっとも現在はリスクを考慮して、予定帝切するケースが多いと思う。

「きみ、ベッケン引いたことあるの？」

「いえ、上の先生が引くことを見たことはありませんが、自分自身で引いたことはありません。どうしましょう。」

「どうしまししょうも何もないだろう。今陣発しているの？臍脱はないだろうね。で、羊水の漏れは？」

「ムッターメントはゲシュロッセン（子宮口は閉鎖、という意味）で、羊水の流出は肉眼的

には確認できませんが、BTBで菁変したので破水は間違いないと思います。臍帯は触れません。まだ陣発していません。」

BTBというのは、酸度を定性測定するテスト用紙のこと。その色が青く変わったということは、膈内にアルカリ性の液体が存在することを意味しており、アルカリ性の羊水が漏出している根拠となる。

「わかった、これからすぐ病院に戻るから抗生剤を投与して、待っていてくれ。」

「どのくらいかかりますか？」

「上山駅から福島に出て、それから新幹線小山まで行き、そこから水戸線に乗り換えて友部まで帰るしかないなあ。列車の都合があるから



からはっきりしたことは言えないが、多分夕方までには着くと思うよ。」

現在のように陣痛を抑える薬がなかった時代の話である。陣発しないことを祈って、僕は取るものもとりあえずスキー場を後にした。

列車の乗継は幸いスムーズに行ったが、それでも友部駅に降り立った時にはスキー場を出発から8時間近く経過しており、夕暮れもかなり深まっていた。病院に着き分娩室へ足を踏み入れた時の当直医のほっとした顔が、今も臉に浮かんでくる。

ところで肝心の出産であるが、僕が病院に着いた時にはすでに陣発していた。微弱陣痛だったので子宮収縮剤を用いて陣痛促進し、朝方の5時過ぎに無事3100グラムの男児が誕生した。軀幹の振り運動と後続児頭の娩出にはファ（2ページにつづく）

(1ページから)

イトスメリー法を用いたのだが、当直医にも手伝ってもらい特に問題のない出産だった。

これが、産科の24時間対応である。

僕は責任ある立場だったので、若い先生と一緒に仕事をしていた茨城県立中央病院時代の4年間は、常時24時間オンコール体制だった。産科の24時間体制では、在宅ケアの24時間オンコール体制とは異なり、呼ばれた時には必ず出血などの事件があり、対応次第では母児へ多大の不利益を与えることになるので、緊張

の度合いが違う。

どんな時間、どんな状況であっても、呼ばれば必ず責任を持って現場に駆けつけ、待たなしの対応を行う。これはホスピスケアの原則であるが、残念ながら、この原則に躓く医師は少なくない。だが厳しい産科の24時間体制を経験した僕にとって、ホスピスケアの24時間体制は負担感が少なく、それが25年間在宅ホスピス医を続ける力になったのだと思っている。

(次号に続く)

中島副院長と工藤看護師の歓送迎会開かれる

中島先生のギター弾き語りのサプライズに拍手喝采

9月末で退職した副院長の中島一光先生の送別会と9月に入職した工藤菜穂子看護師の歓迎会が9月29日昼休み、パリアン研修室で、パリアンスタッフ全員が出席して行われた。

中島先生は、平成24年10月から2年間、クリニック川越の副院長として、パリアンの在宅緩和ケアの医療に携わってこられた。以前から予定されていた名古屋方面でのクリニックの開院準備のため、9月末にパリアンを退職することになった。新しいクリニックでは、パリアンの姉妹ホスピス国内第1号として活躍されることが期待されている。

川越理事長は挨拶の中で、「彼は、とても立派な方でした。人間的にということは何れもだが、医者として素晴らしいものを持っている。2年間一緒に楽しく仕事をさせていただいた。」と話し、これまでの感謝の気持ちを述べられた。



午後からの勤務の関係上、ジュースで乾杯する参加者

工藤看護師への歓迎は、訪問看護パリアンの本田所長から、「喜怒哀楽を上手に出しながら、自然体で楽しみながら働けるように応援します」と歓迎の言葉があり、工藤看護師は「いろいろ勉強して早く慣れて、笑顔を出していきたい」と答えていた。

中島先生の修了式が始まり、パリアンでの中島先生の2年間の思い出を2階のスタッフ全員が1言ずつ語り継ぐという新しい脚色の贈る言葉があり、中島先生も感激していた。そして、川越理事長から、修了証書が授与され、記念品が手渡された。



修了証書が授与された中島副院長(左)と川越厚院長

また、川越厚先生のチェロと氏田看護師のオルガン伴奏で「大きな古時計」が演奏された。次に目玉として、中島先生のギター弾き語りがあった。カウボーイハットをかぶり、本場テキサス仕込みの「カントリー・ロード」など3曲のサプライズがあり、満場大きな拍手が沸いた。

【中島先生の挨拶】

日本のこれからの高齢者医療をずうっと考えてきたが、その中で、終末期医療こそ大切だということで、大きな課題を自分で出して、終末期医療は緩和医療ができなければ、うまくいくはずがなく、緩和なくして在宅も終末期もないということで、緩和ケアに力をいれることに決めた。在宅緩和医療の推進を決めたが、これは、教えてもらわないとできないと思っていたので、川越先生に話したら、快く研修を引き受けてもらった。

終末期医療は、亡くなっていく人達をどうやってケアしていくのか、看取っていくのかに尽きるので、川越先生の麻薬の使い方は非常に勉強になったし、なによりもホスピス哲学をもって、みんなが一つになって取り組んでいく姿を、一緒に見せてもらって、本当に感謝している。

ここで与えてもらった流れを名古屋へ戻ってやるが、皆さんに教えてもらったことを生かしながら、頑張っていきたい。本当にお世話になりました、ありがとうございました。

「今日はいいい日だった」と満足してお帰りなる遺族

9月6日、26年度第1回「メモルの集い」開かれる

平成26年度第1回メモルの集いが、9月6日午後1時からパリアン研修室で、8家族11人の遺族をご招待して、川越厚、博美両先生をはじめ、4人の看護師、6人のボランティアが参加して開催された。

川越厚先生のあいさつで始まったメモルの集いは、11人の遺族の方々が自己紹介と現在の心境について話された。1年経ってもなお癒えない気持ちや故人への思いなど在宅での生活を思い出しながら、かみしめるように語っておられた。

途中で休憩に入り、ボランティアが作ったケーキを食べながら、厚先生のチェロ演奏（曲目：荒城の月、伴奏：氏田看護師）にひと時の安らぎがただよった。

その後、川越厚先生や担当看護師と在宅療養当時の話をされたり、遺族同士で語り合ったりして、参加された方々が自由にお話しされ、午後3時にお開きとなった。手作りボランティアが作成したプレゼントとメモルカードをお渡しし、遺族の方々は満足した面持ちでパリアンを後にした。

【メモルの集いとは：パリアンでは故人を偲び語り合い、心を少しでも癒したいと、大切な方を亡くされて1年目の遺族10名程度をご招待して、年2、3回開催している。その会を「メモルの集い」と呼び、26年度は2回開催予定で、今回は2月21日を予定している。】



川越厚先生のチェロ演奏を聞いて拍手する遺族の皆様

メモルの集いに参加して

亡くなった後でより強くなった家族の絆

看護師 飛延 愛子

パリアンに勤務して1年半、初めてメモルの集いに参加させていただきました。ご遺族はどんな気持ちでいらっしゃるのだろうか、何を話したらいいのだろうか、参加するまではとても緊張しており、少し怖くもありました。しかし、いざ始まると、緊張なんて感じている暇もないほど、ご遺族の言葉に聞き入ってしまいました。日常の中でふとした瞬間に流れる涙、亡くなった後でより強くなる残されたご家族同士の絆。亡くなって1年以上経つ今も変わらない死者への思いと、時間とともに少しずつ癒されていく気持ち。あふれでるようなご遺族の言葉をお聞きして、一つひとつの言葉がとても重く響きました。「自宅で最期を看取れてよかった」「彼女らしい最期でした」これでよかったのかな、もっとこうすればよかったと日々迷いながら仕事をしている中で、今日参加できてよかったと思う自分がいました。「今日はいいい日だった」そう言って帰っていくご遺族の笑顔をとってもまぶしく感じました。

「在宅っていいね」が皆様の感想

ボランティア 渡邊 真紀子

念願が叶って今年6月にボランティアに登録させて頂き、初めての活動として、「メモルの集い」に参加いたしました。

当日は、大切な方をお見送りして1年以上経った方をお迎えしましたが、まだまだ故人は御家族の中で“生きている”と感じたことが率直な感想です。

和やかな笑顔に包まれて始まった会ですが、やはり分かち合いの時には、しんみり涙も。が、厚先生や担当看護師達と当時のことを分かち合えたのは、ご遺族にとって大きな癒しとなったでしょう。皆様それぞれにドラマがありました。皆様の感想は、ある男性の「在宅っていいね」という言葉に集約されていると思います。



メモルの木に散りばめられた遺族の思いが書かれた葉っぱ

遺族も参加されて、公開カンファレンス開催される

9月5日開催 テーマ「患者に関わるさまざまな人の思いとその調整」

今年2回目の公開カンファレンスが9月5日、パリアン研修室で開催された。「患者に関わるさまざまな人の思いとその調整」というテーマで開催されたカンファレンスには、医師、看護師、ヘルパー、学生、ボランティアなど、40名を超える参加者が集まった。



この事例は、在宅療養を希望していたが、一人暮らしに不安を持つ、女性の末期がん患者で、当初は家族の介護支援は困難と思われていたが、途中から妹夫婦の介護支援が得られるようになり、介護も24時間体制が構築され、また友人とのつながりも密になって、患者を取り巻く家族、友人とのつながりや、医療・介護のチームの調整がうまく行った事例である。

患者はとにかく一人暮らしに不安を抱いていたが、その不安も取り除かれて、終末・臨死期には、家族や周りの方々に“ありがとう”の感謝の言葉をかけながら他界された。

ご遺族は、「姉は家で好きなことをして過ごすことができ、これまで聞いたことがなかった“ありがとう”という言葉が聞くことができた。関係者の皆様のお陰です。お別れをしっかりとでき、お葬式でも笑いが絶えず、これが姉が望んでいたものだったと思う」と述べられた。

ディスカッションでは、ある病院の看護師から「一人暮らしは家族関係が希薄な場合が多く、家族が現れないで独りで亡くなるケースが多い」の意見があった。また、「本事例はとてもいいチームだったのだと思う。いいチームが組めるかが患者さんにとって重要だ」「家族がいる方でも自宅で看取る事が少なかった。在宅で看取れるよう進めていきたい」「家族が全然いない人は、家に帰してあげられなかった。介護の24時間サポートを利用して在宅へ結びつけられたら」など建設的な意見が多く出された。

カンファレンスは10分間延長して盛会のうちに終了した。

10月のボランティア活動予定

- ・ボランティアの集い：10月11日（土）午前9時30分～12時30分
- ・訪問ボランティア：10月11日（土）午後0時30分
- ・サロン・ド・パリアン：10月3日、10日、17日、24日、31日は休み
- ・命日カードボランティア：10月16日（木）午前10時～
- ・手作りボランティア：10月28日（火）午後1時～3時
- ・事務ボランティア：10月11日（土）午後0時30分～
- ・ケーキ作り講習会：10月17日午後2時30分 20日午後1時45分



芝田さん提供の花々

「聞き書き」講座は11日9時30分～12時

第3回ボランティアの集いは、10月11日（土）午前9時30分から12時まで、「聞き書き」の大御所、小田豊二先生をお迎えして、「聞き書き講座」を行います。1回のみ限定講座です。

参加希望者はメール<volunteer@pallium.co.jp>またはFAX(03-5669-8310)・電話(03-5669-8302)にて申し込んでください。

「聞き書き」終了後、午後0時から、活動報告と今後の活動予定の連絡を行います。

編集後記

中島先生が9月末でパリアンを退職された。2年間副院長として活躍され、厚先生は全幅の信頼を寄せられていた。厚先生が足を骨折された時などは、中島先生がフル回転で患者を回ったことだろう◆送別会での2階のスタッフの贈る言葉の中で「患者さん、ご家族そしてスタッフまでも和ませてくれた笑顔と親父ギャグ」があり、「2年間ありがとうございました」と締めくくっていた。患者さん宅でも巧みな語り口で話され、きっと評判だったと思うし、退職を寂しがられたと思う。サロン・ド・パリアンにも度々ご出席いただき、患者さんに元気を与えてくださった。◆中島先生にとっては、名古屋に戻って、パリアンで培った在宅医療を自ら開始するのだから、今まで以上のご苦勞が待っているだろうが、持ち前の明るさで乗り越えて、きっとパリアン姉妹ホスピス国内第1号として活躍されることを期待したい。ご健康をお祈りします(I. E)

在宅ホスピスボランティア講座受講生募集



私たちと一緒に活動しませんか？



ボランティアグループパリアンは、最期のときをご自宅で過ごしたいと願うがん患者さんや家族の暮らしを、パリアンのスタッフと共にチームで支えます。在宅ホスピスケアのボランティアとはどういうものなのかを広く知っていただき、パリアンでボランティアとして一緒に活動しませんか？

《パリアンの活動についてはホームページやブログをご覧ください。 [パリアン](#) [検索](#) [クリック](#)》

■対象 **在宅ホスピスケアに興味があり、
ボランティア活動を希望する方**

■日時 **平成26年11月29日（土）10：00～16：00**

■会場 **医療法人社団パリアン**

（東京都墨田区立川 2-1-9 KHハウス 1階研修室

■講座概要 **1 パリアンの在宅ホスピスケアについて
2 チームケアとパリアンボランティアの活動紹介**

■募集人員 **10人（先着順で定員になり次第、締切ります）
《応募いただいた方には事務局からご連絡いたします》**

■受講料 **500円（資料・昼食代として）**

■申込締切日 **平成26年11月22日（土）【必着】**

■申込方法 **氏名、性別、年齢、住所、連絡先を記入の上、下記
申込先にFAXまたはメールにてお申込みください。**

■申込先・問合せ先 **医療法人社団パリアン ボランティア講座事務局
FAX：03-5669-8310/TEL：03-5669-8302
e-mail：volunteer@pallium.co.jp**

がんサロン SAKURA

がんサロンSAKURA(さくら)は、がん患者さんとご家族が、体験や悩みを分かち合い、よりよく日々を過ごせるよう支え合う場です。毎回、医師など専門家によるミニ講義を行います。また、個別の相談もお受けします。どうぞお気軽にご参加ください。

日時:平成26年11月8日・22日・29日、平成27年3月14日
いずれも土曜日 午後2時～4時

※一部の回のみ
の参加も可能です。

会場:すみだ女性センター(墨田区押上2-12-7-111) 3階 第2・3会議室
「押上駅」A3出口徒歩5分・「とうきょうスカイツリー駅」徒歩7分

対象:がん患者さんとご家族(患者さんのみでも参加できます)

プログラム

I. ミニ講義(約20分) ※内容は一部変更になることがあります。

- 11/ 8 「がん」とはどんな病気? (東京都立墨東病院院長 梅北信孝先生)
- 11/22 「がん」にやさしいお食事 (賛育会病院栄養科 山本由紀氏)
- 11/29 がん患者を支える社会資源(都立墨東病院がん相談支援センター 田中寛子氏)
(3/14は、専門家を交えた語り合いの時間を予定しています)

II. 語り合い

参加者の皆さんが、がんの体験や悩みを語り、「がんと共に生きていくこと」を考えます。

III. 個別の相談 ご希望の方はお申し出ください。

参加費:無料 **定員:**先着20名(各回)

申込み:各回開催日5日前までに、お名前(同伴者がいる場合はその方のお名前も)・住所・電話番号・参加希望日を、下記申込み先へご連絡ください。

※裏面にFAX用の申込み用紙があります。

※定員(各回20名)に達しましたら締め切らせていただきます。

お申込み・お問合せ先

企画運営:**NPO法人すみだ在宅ホスピス緩和ケア連絡会あこも**

TEL 03-5669-8302 / FAX 03-5669-8310 / E-Mail s-sumida@pallium.co.jp

共催:東京都立墨東病院・社会福祉法人賛育会賛育会病院 主催:墨田区

平成26年度墨田区在宅緩和ケア事業 がん相談会

がんサロンSAKURA(さくら)

FAX用申込み用紙

参加ご希望の方は、この申込み用紙にご記入の上、FAXするか、
同じ内容をメールでお送りください。

FAX : 03-5669-8310

E-Mail : s-sumida@pallium.co.jp

参加希望日 (該当部分に ○をつけてください)	全回参加 一部参加 (参加希望日に○をつけてください) 11/8 ・ 11/22 ・ 11/29 ・ 3/14
お名前 (患者さん)	
住所	
電話番号	
同伴者のお名前 (参加の場合のみお書きください)	患者さんとの 続柄 _____
このがんサロンを何で お知りになりましたか？	

※お送りいただいた個人情報、当事業関係のみに使用させていただきます。

会場のご案内

すみだ女性センター

(墨田区押上2-12-7-111)

3階 第2・3会議室

「押上駅」A3出口徒歩5分

「とうきょうスカイツリー駅」徒歩7分

